

# ジョン・デューイ『価値づけの理論』（下）

岩 田 浩 記

John Dewey, *Theory of Valuation* (2)

IWATA Hiroshi

## V. 目的と価値

価値を欲望と関心に関係づけ、それから貴ぶことと値踏みすることの間に、目的と手段の間に明確な区分を進んで立てていく諸理論の困難の源泉は、その下で欲望と関心が生じ機能するところの、そしてその中で目的対象つまり目論見がその現実的内容を獲得するところの、現実の諸条件を経験的に調査することができないことである。そのような分析が今や試みられよう。

われわれが欲望の現実的発生とその対象および後者に帰せられる価値・特性を（欲望の一般的概念を単に弁証法的に操作するのではなく）探究するとき、欲望が「何らかの問題がある」とき、現状に何か「困難」があるときにのみ生ずるのだということは、何ものにもまして明らかである。分析すると、この「何らかの問題」とは、それが置かれている現状において欠乏し不足している何かがある、つまり現存する諸要素の中に対立を生む欠如があるという事実から発生することが分かる。事物が万事円滑に進行しているとき、欲望は生じないし、目論見を企てる必要も全くない。というのも、「円滑に進行すること」は、努力や奮闘の必要がないことを意味するからである。それは、事物にその「自然の」行程を取らせるまでのことである。将来何が起こった方がより良いかを調査する必要はないし、したがって目的対象の立案もないのである。

さて、生命衝動と獲得された習慣は、しばしば目論見や目的の介在なしに働く。誰かが

自分の足が踏まれたことに気づいたとき、おそらく彼は気障りになる要素を除去するために押し返すであろう。彼は一定の欲望を形成し、達せられるべき目的を立てるために立ち止まりはしない。歩き始めた人は、次の一步でどんな目的が得られることになるかを探究するために、行為の道程を絶えず遮ることなく獲得された習慣の力から歩行し続けよう。これらの基本的な例は、多くの人間活動の典型である。行動はしばしば直接的であるので、何の欲望も目的も介在せず、また何の価値づけも生じない。先入見をもった理論からの要請のみが、飢えた動物は達すべき目的対象の観念を形成したから、あるいはそれが欲望の観点でその対象を評価したから、食べ物を求めるのだという結論に達するであろう。有機体の緊張は、動物がその緊張を解く材料を見つけ出すまで、その動物を歩かせておけば十分である。しかし、もし**欲望と目論見**が生命衝動や習慣的傾向の生起と活動の実施との間に介在するならば、その衝動や傾向はある程度修正され変容される。それは全く重複した言明である。というのも、目論見に関係した欲望の生起は先験的衝動や常軌的習慣の変形であるからである。そのような場合においてのみ、価値づけが生じる。既に見たように、この事実は、価値づけを欲望と関心に関係づける理論に関連しているように最初思われていたよりも、ずっと重大である<sup>1)</sup>。というのも、それは、価値づけは何らかの問題、取り除かねばならないある困難、改善されねばならない何らかの必要、欠乏、ないしは困窮、現状を変えることによって解決される何らかの傾向性の対立、があるときにのみ生起するということを証明するからである。この事実は翻って、価値づけがあるときはいつでも知性的要因——探究の要因——が存在していることを証明する。というのも、それに従えば、現存する必要や欠乏に補給し、現存する対立を解決するようなものとして、目論見が形成され企画されるからである。このことから、異なる諸欲望とそれらに相関する目論見とにおける差異は、2つの事物に依存するということになる。第1は、現状の欠乏と対立の探究が実行されてきたその妥当性である。第2は、打ち立てられた特殊な目論見が採用されたら、実際に現存する必要を充足し、必要とされるものから構成される要請を満足させ、そして諸事象の統一された状態を創設するために活動を方向づけることによって対立を除去しうる可能性を探究することの妥当性である。

真相は経験的にも弁証法的にも非常に単純なので、一部は内観心理学から一部は形而上学から引き出された見当違いな理論的先入見の影響がなかったなら、なぜ議論がこれほど混乱するようになったかを理解するのは極めて困難だったのであろう。経験的には、2つの選択肢がある。行為が目論見をもってなされうるか、あるいはそれなしになされうるか。

1) 『価値づけの理論』(上)『大阪産業大学論集(人文・社会科学編)』1号, 2007年, 109ページ以下参照。

後者の場合には、何の価値づけも介在しないあからさまな行為がある。生命衝動や既定の習慣は直接的に何らかの直接的な感覚刺激に反応する。目論見が存在し価値づけされる場合、つまり目論見が欲望や関心との関連で存在する場合には、関与される(運動)活動は反復的に言えば、**予見された目的**として欲望や関心の構成の内に入ってくる結果の予想によって媒介される。さて、しばしば繰り返して述べてきたように、事物は、目的がそれによって生み出されるところの諸条件の観点でのみ、**目的**や**成果**として予想され予見されうる。それによって目論見が生み出されるところの手段を何かごく僅かでも考慮することに基づかずして、目論見をもったり、ある提起された行為の行程の結果を予想したりすることは全くできない。さもなければ、本当の欲望は存在せず、ただ怠惰な空想や馬鹿げた願望だけが存在する。生命衝動や獲得された習慣が幻想に耽ったり空中樓閣を画いたりする経路に消耗することができるということは、不幸にも真実である。しかし、記述したところによると、夢と空中樓閣の内容は目論見ではない。そして、それらを空想的なものにするものはまさしく、目論見がそれを実現させる手段として役立つ現実の諸条件の観点では形成されないという事実なのである。**事物(行為と材料)が手段としてそこで値踏みされている命題は、目的価値を決定する欲望と関心の中に必然的に入り込む**。それゆえ、手段としての事物の値踏みに帰着する探究が重要なのである。

事態は極めて明確なので、それを直接論じるのではなく、目的が達せられる手段の価値づけとは別個に価値を有する目的というような事物があるとどのようにして信じるようになったか、を考察する方がより有益であろう。

1. 情動的運動活動を単なる感情に「還元する」ために働く精神的心理学は、**目論見**、**目標**、および**狙い**に当たる解釈においても働いてきた。それらは、未来の出来事の予言と同じ段階の結果の予測として、またいかなる場合でも、その内容と妥当性についてそのような予言に依存するものとして扱われるのではなく、単に精神状態として扱われてきた。というのも、それらがそう考えられるときには(そしてそのときのみ)、目的、必要、および満足は価値づけの理論全体を歪曲するように影響されるからである。ある**精神状態**としての目的、狙い、あるいは目標は、それによってそれが実現されるところの生物学的ならびに身体的手段から独立している。欲望のあるところではどこでも存在する不足、欠乏、あるいは困窮は、したがってその状況において欠如したり不在していたりする何か——経験的状况が完結的であるべきなら補われなければならない何か——としてではなく、単なる「精神」状態として解釈される。前者の意味では、必要なものや要求されるものは、もし目論見が現に生み出されるべきであるならば、**存在的に不可欠**であるものだ。この場合、必要とされるものは、精神状態の検討によって告知されうるのではなく、現実

の条件の検討によってのみ告知されうるのである。「満足」の解釈に関して、精神状態としてのそれと条件の充足としてのそれ、すなわち結合した諸潜在力と欲望がそこで生じ機能するところの状況の欠如とによって課される諸条件に合致する何かとしての満足、との間には明らかな相違がある。欲望の満足は、欲望を引き起こす状況に特徴的な欠如が、用いられる手段が目的を達成するための条件を全く文字通り充足させるかのように、適っているということを意味する。目的、必要、および満足の主観的解釈のゆえに、価値づけが人格的態度と超人格的事物との間の関係——さらに運動（従って物理的）要素をも含む関係——であるという言葉の上では正しい言明は、手段と目的の分離、値踏みと貴ぶことの分離を包含するように解釈される。ある「価値」は、そのときある「感情」——明らかに、それ自身以外の何ものについての感情でもないところのある感情——であると断言される。もし仮にある「価値」が**感じられる**と言われたならば、その言明は、人間の動作態度と超人格的な環境条件との間に現存するある特定の関係が直接的経験の問題である、ということの意味するように解釈されるかもしれない。

2. **欲望 - 関心**としての価値づけと**享受**としての価値づけとの間の立場の移動は、理論に更なる混乱を導入する。その移動は、事実そこに、欲望や努力なしに直接所持される事物の享受と、欲望を満たすのに必要とされる諸条件を獲得するために注がれる活動ゆえにのみ所持される事物の享受の両者が存在するがゆえに、促進されるのである。後者の場合、その享受は欲望や関心の機能的関係にあり、したがって欲望 - 関心の意味での価値づけの定義に何ら違反してはいない。しかし、同じ「享受」という言葉が先行する欲望と随伴する努力とは全く関係なく生ずる満悦にも当てはまるので、立場が移された結果、「価値づけること」は、どのようにして生じたものにせよ、ありとあらゆる享受の状態——どんなに思いがけない偶然な仕方でも、「偶然的な」というのは欲望や意図とは別個に生ずる意味であるが、そういった仕方で獲得された満悦を含んで——と同一視される。例えば、人が未知の親類から財産を残されたことを知った喜びを想定せよ。そこには**享受**がある。しかし、もし価値づけが欲求と関心の観点で定義されるなら、そこには何の価値づけもないし、またその限りでは、何の「価値」もない。後者は、その金を何に使おうかということについて何か欲望が生じ、目論見の形成に関してある疑問が生ずるときにのみ、現れてくるのである。二種の享受は、かように異なっているだけでなく、各々の価値づけの理論に関する意味は相互に両立不可能である。というのも、一方は直接的所持に関連し、他方は所持の先行する欠如に条件づけられる——その場合にこそ欲望が入り込むのだが——からである。

強調するために、やや異なった例で要点を繰り返すことにしよう。例えば、通を歩いて

いるときに拾った金といった幾らかの予期しなかった金を手にして、つまり彼がそれを遂行している瞬間では彼の目標や欲望とは何の関係ももたない行為によって、悦んでいる男のケースを考えてみよう。もし諸価値がその定義の内に関係が含まれるような仕方では欲望と関係づけられるなら、その限りでは価値づけは何ら存在しない。後者は、その発見者がその金をどれほど貴び大切にするか考え始めるときに、始まる。例えば、彼はこれまで満たせなかったある欲求を満たすためにそれを貴ぶであろうか。あるいは、その所有者が見つかるまで預かっておくべきものとしてそれを大切にしようか。いずれの場合でも、定義上、価値づけの行為がある。しかし、価値の特性が2つの場合では非常に異なった対象に置かれているのは、明らかである。もちろん、使われる金の使途、つまり金で助長されるだろう目論見はかなり標準化され、その限りでは、今挙げた例は特にはよく選ばれない。しかし、輝いた滑らかな石を見つけた子供の場合を考えてみよう。彼の触覚と視覚は悦ばされる。しかし、それで何がなされるべきかという問題が起きるまで、つまりその子供が偶然思い当たったものを珍重するまでは、何の欲望も目論見もないのだから何の価値づけもない。彼がそれを貴び大切にしようとする瞬間、彼はそれをある使用に供し、それによってある目的に対する手段としてそれを使用する。そして、彼の成熟次第では、それをその関係において、つまり目的に対する手段として評価したり価値づけたりする。

欲望と関心に関係づけられる価値づけから欲望と関心への関係とは無関係な「享受」へと移行がなされる場合、理論の中で生起する混乱は、(価値づけに関する)欲望と関心の目的地への到達それ自体が享受されるという事実によって促進される。その混乱のもつれ目は、共有をそれがその下で生起するところの諸条件から孤立させるところにある。だが、欲望の充足と関心の実現の結果である享受は、必要や欠如の満足あるいは補足——目論見としての何事かの観念によって方向づけられた努力によって条件づけられた満足——のゆえに、あるがままの享受なのである。この意味で、「享受」は所有の欠如との本来的な関係を含むが、他の意味では、「享受」は完全所有の意味である。所有の欠如と所有とは矛盾する語の反復である。さらに、達せられた欲望の対象が享受されないのは一般的な経験であるから、享受は得ることよりも求めるところにあるのだという趣旨の諺が幾つかあるのは一般的なことである。これらの諺を、当の出来事が欲望と関連した価値と単なる享受としての価値との間の相違の存在を証明するということを文字通り認めているのだと考える必要はない。最後に、日常経験のこととして、享受は価値づけの問題の原初的な材料を提供する。いかなる「道徳的」諸問題とも全く関係なく、人は絶えず、所与の享受が有価値であるかどうか、あるいは享受を生み出す際に関与する諸条件がそれを高価な道楽にするようなものなのかどうか、と自問するのである。

「諸価値」が生命衝動という用語で定義されるときに生ずる、理論における混乱に関する言及は先になされた（提起された根拠は、生命衝動は諸価値が生命衝動「から発する」という意味で、諸価値の存在条件であるということである）。この章句を引用したテキストには、密接な関連で以下の言明に突き当たる。「合理性の理想そのものは、他のいかなる理想とも同様、恣意的なものであり、有限な組織の必要に多く依存するものである」。この章句には、2つの異常な概念が暗示されている。その1つは、もし理想が現実の存在によって因果的に条件づけられ、そして人間存在の現実の必要に関連しているならば、それは恣意的であるということである。この考え方は異常である。なぜなら、理想とは、それが存在する事物と結びつけられず、また具体的な現存する要請に関係づけられない程度に、恣意的である、ということが当然想定されるだろうからである。もう1つの奇想天外な考え方は、合理性の理想は、それがそのように条件づけられているから、「恣意的」なのだということである。人は、合理性の理想が（その恣意性とは反対に）その道理性に関して、その起源に基づくのではなく、その機能に、つまりそれが行うことに基づいて判断されるべきであるということが、合理性の理想に殊のほか当てはまると考えるであろう。もし理想や一般化された目論見としての合理性が行為を方向づけるのに役立ち、それゆえそのように方向づけられた行為の結果経験された事物が具体的にもっと道理的になるならば、それ以上願うことはありえない。その含意された考え方は双方とも非常に異常なので、それらは若干表現されていない先入見に基づいてのみ理解されうる。判断されうる限り、これらの先入見とは次のようなものである。(i) 理想は存在とは独立して、すなわち先験的であるべきである。生命衝動における理想の起源への関連づけは、実際にこの先験的見解の効果的な批判である。しかし、それは、もし先験的見解が受容されさえすれば、観念を恣意的であると呼ぶ根拠を与えてしまう。(ii) もう1つの先入見は、「目的自体(ends-in-themselves)」すなわち、もしその機能の観点で判断され価値づけられるなら、手段でもないところの、既に見たように、まさしく理想そのものであるような目的ないしは理想、が存在する、あるいは存在すべきであるという見解を受容するように思われる。現存する起源並びに経験的起源ゆえに、一般化された目論見あるいは理想は恣意的であるという結論に達する唯一の道は、初めに究極の規準として、目的は手段でもあるべきではないということの規定することである。全文並びにその内で典型的かつ効果的に表示されている見解は、徹頭徹尾正当な目的としての「目的自体」を信じる遺物を思わせる。

## VI. 目的 - 手段の連続

焼豚の起源に関するチャールズ・ラムのエッセイを読んで面白かった人は、その馬鹿馬鹿の面白さが、それによって達せられるべきところの手段から離れて、またその目的自身が手段として更に機能するということから離れて打ち立てられた何らかの「目的」の馬鹿馬鹿しさを知覚したことによるものだ、とはおそらく意識しなかったであろう。また、ラム自身が、そのような分離をする諸理論を意図的にもじったものとしてその物語を書いたことはありそうもない。にもかかわらず、それがその物語の要点のすべてなのである。その物語とは、豚を閉じ込めていた家が偶然焼失したとき、焼豚の味が初めて分かったということであることが、思い出されるであろう。焼け跡を探している間に、家主は火事で焼けた豚に触って指を火傷した。衝動的に指を咥えて冷ますと、彼らは新しい味覚を経験した。それに味をしめて、以来彼らは家を建てては豚を閉じ込め、それからその家を焼き払った。さて、もし目論見が全く手段から離れたものであり、手段の価値づけとは独立してそれ自身の価値を有するならば、この手順には何も馬鹿げたことはないし、滑稽なこともない。というのも、達せられる目的、**事実上の**終点は、焼豚を食して楽しむことであり、それがまさに望まれる目的であったからである。達せられる目的が用いられる手段——それによって望まれる目指す結果が達せられるかもしれないところの他の利用可能な手段との比較で、家を建てて焼却すること——の観点で推計されるときにのみ、用いられる方法について何らかの馬鹿らしく不合理なことが存在するのである。

その物語は、もう1つの点、すなわち「本来的」の意味に直接関係がある。焼豚の味の**享受**は、たとえそうであるにしても、その享受がそれを得るのに払った不必要な代価を思い出して憶えている人々にとっては幾らか困惑ではあろうけれども、直接的であると言われるかもしれない。しかし、享受の直接性から何か「本来的価値」と呼ばれるものに進むことは、何の根拠もない飛躍である。達せられる目的としての対象の**享受の価値**は、目的、つまり成果であることにおいて、その結果であるところの手段に関係して存立するあるものの価値である。したがって、もし当の対象が目的あるいは「終局的」価値として貴ばれるならば、それはこの関係において、あるいは媒介されたものとして価値づけられる。初めて焼豚が賞味されたとき、それは目的価値ではなかった。というのも、それは記述によれば、欲望、予見、および意図の成果ではなかったからである。引き続き生起することについては、それは記述によると、先行する予見、欲望、および努力の結果であったから、目論見の地位を占めたのであった。以前の努力が到達したものの享受を高める場合がある。

しかし、目的としてのあるものに達したときに、人々が自分達が余りに高い代価を払って努力し、また他の諸目的を犠牲にしたことを知る場合も多い。そのような状況では、達せられた目的の**享受**はそれ**自身価値づけられる**のである。というのも、それはその直接性ではなく、その代価の観点で考えられているからである——いかなる場合でも、それが自己矛盾的な語である「目的自体」とみなされることには致命的な事実がある。

その物語は、通常「目的は手段を正当化する」という格言が意味するところのものに、またそれに対する一般的反論にも大きな光明を当てる。このケースに適用すると、達せられた目的の価値、つまり焼豚を食べることは、それによって目的が達成されたところの手段——住居の破壊と住居が与える諸価値の犠牲——に支払われる代価に相当するものであった、ということの意味しよう。「目的は手段を正当化する」という格言に含まれる考え方は、基本的には目的自体の観念にある考え方と同じである。事実、歴史的観点からすれば、それは後者の結実である。というのも、ある事物は目的自体であるという考え方のみが、目的-手段の関係はもっぱら目的から手段へ進む一方的なものだという信念を保証しうるからである。その格言が経験的に確かめられた事実と比較される時、両者とも事実とは相容れない2つの見解の1つを支持することに等しい。その見解の1つは、心に描いている特別に選択された「目的」のみが用いられる手段、つまり使用される手段が他の通常の効果をもたないように奇跡的に介入する何らかのものによって実際生み出されるだろう、ということである。もう1つの（そして、より確からしい）見解は、選択され無類に貴ばれる目的の重要さと比べて、他の諸結果は、どれほど本来的に気障りであろうとも、完全に無視され黙過されうることである。その目的として、従って用いられる手段の保証として（その**他の**諸結果がいかに不都合なものであろうとも）達成された諸結果のある部分をこのように恣意的に選択することは、それがその目的として目的自体であり、それゆえ、あらゆるその現存する諸関係にもかかわらず「価値」を所有しているのである、と考えることの結実なのである。そして、この考え方は、「目的」はそれに達する際に手段として使われる事物の値踏みから離れて価値づけられうる、と想定する**どの**見解にも固有のものである。その目的は手段が生み出す他の諸結果にもかかわらず、その際「その目的」として手段の使用を正当化する現実の諸結果の恣意的に選択された一部である、という見解に対する唯一の選択肢は、諸欲望、諸目論見、および達成された諸結果は翻って更なる諸結果の手段として価値づけられるということである。先の格言は、現実の諸結果という意味での諸目的は、利用される手段に保証——正しい位置——を与えるという言葉を装って、実際には、これらの現実の諸結果のある断片——心がそれに置かれているがゆえに恣意的に選択された断片——が、用いられる手段の諸結果として他の諸目的を予想し秤



量する必要もなく、それを獲得するための手段の使用を公認することを述べている。かくして、それは、諸目的はそれに関わる手段の値踏みとは無関係な、またそれら諸目的自体の更なる原因効能とは無関係な価値を有する、という立場に含まれる誤謬を顕著に開示するのである。

かくして、われわれは既に述べた点に連れ戻される。あらゆる自然科学(「自然」をここでは非人間的の同義語として用いる)では、すべての「結果」はまた「原因」でもあり、つまりより正確に言えば、出来事の連続的流れの部分ではないという意味で終局的なものは何も起こらない、と今では当然視されている。もしこの原理が、目的ではあるが手段ではない対象を信じることへの不信を伴って、特に人間事象を扱うのに用いられるならば、目的と手段の区別は暫定的かつ関係的であるということに必然的になる。手段として役立つために生み出されなければならないいずれの条件も、その関係において欲望の対象であり目論見であるのに対して、実際に達せられた目的は以前になされた価値づけのテストであると同様に未来の目的への手段である。達せられた目的は更なる先の現存する出来事の一条件であるから、潜在的な障害ならびに潜在的資源として値踏みされなければならない。もし目的自体としてのある対象に関する考えが、単に言葉だけではなくすべての実際的関わりにおいて放棄されたとすれば、人間は歴史上初めて、出来事の一時的な相互関係の経験的に根拠づけられた命題に基づいて目論見を組み立て欲望を形成する地位に就くようになろう。

いつに限らず社会的集団における成人は、その諸目的が慣習的に非常に標準化されているので検討されることなく当然視されるような、幾つかの目的を持っている。それゆえ、生ずる問題は唯一それに達する手段に関わるだけだ。ある集団では金儲けがそうした目的であろう。別の集団では政治的権力の所有が、また他の集団では科学的知識の進歩が、さらに別の集団では武勇がそうである、等々といったように。だが、そうした目的は、いかなる場合でも(i)名義上の「目的」がその範囲内に確定した諸目的——それは手段としての事物の値踏みによって決定される——が入る境界を設定するところの多少なり空白な枠組みであるが、(ii)そうした目的が手段と目的の関係の批判的検討なしに立てられてきた習慣を単に表すにすぎない限り、それらは価値づけの理論が従うようなモデルを提供しない。もし人が甚だ有難くはないのだが、厳寒の経験に刺激され、自分の家を焼き払っても暖をとるだけの価値があると咄嗟に判断したとすれば、「神経感動性強制力」によって決定される行為から彼を救うものはただ、自宅の喪失のために他のどのような結果が生ずるかということを知的に実現する以外にない。実際に出来事が生ずるところの感動的諸変化の世界の脈絡から目的として投企されたある出来事を孤立して取り出すことは、必ず

しも（ここに引用した場合のように）狂気の記ではない。しかし、人が自己の目的を更なる先の諸結果の感動的条件としても見ることができず、それによってその出来事を、「終局的」が諸出来事の進行が完全な停止に至ることを意味するという意味で、**終局的なもの**として扱うときには、それは少なくとも未熟の記である。人間は、そのような制動装置に身を委ねる。しかし、それを目的理論形成のためのモデルとして扱うことは、それが生じ機能する脈絡から抽象した、観念操作を具体的諸事実の観察結果に代用することである。それは、狂気、未熟、固定した常軌性のいずれかの記、あるいはこれら3つすべてを混合した狂信の記である。

目的および価値の一般化された諸観念は疑いなく存在する。それらは、習慣の表現として、また無批判のかつ多分に説得力のない観念として存在するのみならず、いかなる主題にも生ずる妥当な一般的観念としても同様に存在する。類似の状況は繰り返される。欲望と関心は、ある状況から別の状況へ持ち越され、前進的に固められる。一般的諸目的の予定表が生じ、そしてそれに関わる諸価値は、いかなる特殊的存在のケースにも直接関係していないという意味で「抽象的」なのであり、経験的に存在するあらゆるケースから独立しているという意味でそうなのではない。いかなる自然科学を扱う際の一般的観念とも同じく、これらの一般的観念は、特定のケースが生じるたびにそれを判断する知的手段として用いられる。それは、実際には具体的な事物の検討を指導し促進する道具であるが、同時にまた、これらのケースにおけるその適用結果によって発展されテストされる。概念の弁証法が現存する実情に関する結論に達するために用いられることがなくなり、その代わりに、特殊に効果的に適用される仮説に達する手段として用いられたとき、自然科学が確実な発展の経路を取り始めたのと同じように、人間の諸活動と諸関係の理論についてもそうなるであろう。価値の一般的観念に特殊な欲望と目的の評価に対する規則として機能させるような経験される諸活動の連続は、欲望がただそれが起こるといだけの事実によって、諸活動の連続におけるその脈絡とは全く別個に、目的としての対象に価値を付与するという考え方の源泉になってきたはずだという事実には、アイロニーが存する。

これに関連して、前述した「直接性」と「本来的」の概念操作と類似した様式で「終局性」の観念が操作される危険がある。価値は、具体的なケースで働く諸条件、つまり一方では衝動と欲望を含む諸条件と他方では外的諸条件との分析的踏みの過程の結論を表示するという意味で、**終局的**なのである。結論を保証するためになされる探究によって達せられるいかなる結論も、そのケースにとって「終局的」である。「終局」は、ここでは論理的な力をもつ。価値づけ過程で形成される**最後の**欲望と相関する価値の質あるいは特性は、同義反復的に言えば、その特殊状況にとって究極的なのである。しかしながら、それ

は明示可能な暫定的な**目的 - 手段関係**に当てはまるのであり、目的それ自体である何かに当てはまるのではない。終局的特性あるいは性質と終局性の特性あるいは性質との間には根本的な差異がある。

ここで述べた見解に対して常に提起される反論は、それによると、価値づけの活動と判断は希望のない**無限後退**に巻き込まれるということである。もし翻って手段ではない目的など存在しないならば、予見は停止しうる場所をもたないし、また最も恣意的な行為——**純粹価値命題**であることの要求を嘲るほど恣意的な行為——による以外には、いかなる目論見も形成されえない、と言われるのである。

この反論は、その下で欲望が形成され、予見された結論が達せられるべき目的として投企されるところの諸条件に連れ戻される。これらの諸条件は、必要、不足、および対立のそれである。個人とそれを取り巻く諸条件との間の緊張条件を離れては、われわれが見てきたように、何か他のことで欲望が喚起される場合はありえない。目的形成を誘引する何もものないし、いわんや理論的に可能な無数の目的から他のいかなる目的でもなく、ある1つの目的を形成するよう誘引する何もものない。活動的諸傾向を特殊な目論見が組み込まれる欲望に変形することの統制は、現状の要求が観察に開示されるので、その現状の必要や欠乏によって行使される。思い浮かんでくるさまざまな目的の「価値」は、現存する不足を改良し、文字通りの意味で**満足させる**際に行為を指導するためにそれら諸目的が表示する能力によって見積もられ測定される。ここに、手段としてのその機能において目論見を予見し、比較考量する過程を切り捨てる要因がある。今日の禍は今日で十分であるのだが、現存する禍を廃棄するところの**善**もまた今日で足りるのである。それが完結の状況あるいは諸条件の統合的組合せを打ち立てる手段であるがゆえに、十分なのである。

2つの例証が与えられよう。医師は、特定の患者のケースにおけるさまざまな処置経過とその結果の価値を決定しなければならない。彼は、彼の検査により開示されるものが患者の「病状」や「病氣」であるということに基づいて、その処置の採用を正当化する価値を有する目論見を形成する。医師は、これらの病氣が存在しないような、患者が「健康を回復する」であろうと通常言われるような、ある条件を生み出す能力に基づいて医師が行なうことの価値を評価するのである。彼は、ある絶対的な目的自体、つまりそれによって何をなすべきかを決定するところの絶対的な善として健康の観念を有するのではない。むしろ、彼は、目的ならびに患者にとっての善(価値)として健康に関する自らの一般的観念を、彼の検査技術が患者の患う病氣とそれを克服する手段が何であるかを示すものに基づいて、形成する。一般的かつ抽象的な健康概念が最終的には発展することを否定する必要はない。しかし、それはかなりの明確な経験的な探究の成果であって、探究を実行する

ためのアプリアリな先行条件となる「標準」ではない。

もう1つの例は、より一般的である。あらゆる探究において、どんなに完全な科学的探究においても、1つの結論として提起されるもの（その探究における目論見）は、調査中に諸条件によって提示された**問題**を解決するその能力に基づいて、その価値に関して評価される。具体的なケースでは、提起された解決策の価値を決定するためのアプリアリな標準など存在しない。目論見としての仮定的に可能な解決策は、更なる先の観察と実験を方向づける方法論的手段として用いられる。それは、そのために採用され試みられるところの問題解決の機能を果たすか否かである。経験の示すところでは、問題は概ね特定の回帰的な類のものになるから、提起された解決策が特殊なケースで満足させねばならないと信じられる一般的諸原理が存在する。かくして、そこでは、満足させられるべき諸条件のある種の枠組み——所与のケースで**経験的に**規制された仕方働く関連性の枠組み——が発展する。われわれは、それは「アプリアリ」な原理として働くと言いきえするかもしれないが、しかし科学技術的技法の操作規則が所与の技法のケースにおいて**経験的に**先行し、かつ支配的でもあるというのと全く同じ意味においてのみ、そう言えるのである。人間が健康か病気か、あるいはいかなる点で彼は病んでいるのかを決定するために、人間の現状がそれと比較されうところのアプリアリな健康基準など存在しないのではあるが、立ち現れる新しいケースに効果的に適用可能な特定の規準は過去の経験から発展してくる。目論見は、事態における何かの欠如あるいは対立ゆえに、不都合が見出されるその事態に対処する行動の方向づけにそれが役立ちうということに基づいて、**良い**とか**悪い**とか**価値踏み**されたり**価値づけ**られたりする。目論見は、この目的を達成する際のその**必要性**に基づいて、適合か不適合か、適正か不適正か、**正しい**か**間違い**か、として**価値踏み**される。

人間の経験における困難および「悪」（欠乏、失敗、挫折という意味での諸悪）の偏在というべきものを考察すれば、またそれらのものを言いふらして費やしてきた時間の総計を考察すれば、人間活動に関する諸理論は、その諸困難がその条件と結果が解決方法を見出す目的で探求されるところの**問題**として考えられる場合に与えうる具体的機能を不思議なことに忘却している。今あげた2つの例、つまり医術ならびに科学的探究の進歩は、この点で非常に示唆に富んでいる。実際の出来事が標準や規範として何らかの絶対的目的価値との比較によって判断されるべきものと考えられた限り、何ら確実な進歩もなされなかった。健康の標準と知識の諸条件の充足標準とが、ある問題において言明可能な困難を明らかにしながら現状の分析的観察の観点で考慮されたとき、判断規準は、その困難の源泉を定め、それを処理する効果的手段を示すために観察下で使用されるまさにその過程を通して、前進していく自己矯正的なものであった。これらの手段は、ある抽象的標準や理想

ではなく、特殊な目論見の内容を形成する。

このように、目的および価値の設定における制御要因として欲求および対立の機能を強調することは、価値が内容と意味においてそれ自身消極的であることを意味しない。価値は消極的要因、不足、欠乏、困窮、および対立に関連して立てられるが、その機能は積極的であり、その機能の遂行によってもたらされる解決は積極的である。ある目的を直接獲得しようと努めることは、経験される困難の源泉であるまさにその諸条件を働かせ、それによって、そうした条件を強化し、またせいぜいその条件が明らかにする外形を変える。消極的な関わり(すなわち、何らかの困難や問題)から立てられた目論見は、煩わしい結果を生み出す諸条件の働きを禁ずる手段である。それは、積極的諸条件が拠り所として働けるようにし、それによって最も高い可能性の意味で、内容的に積極的である結果を達成させる。目論まれた対象としての目的の内容は、知的かつ方法論的である。達せられた成果あるいは結果としての目的の内容は、存在的である。それは、目論見を喚起する必要および対立の除去を表示する程度において積極的である。消極的な要因は、適切な目的観念を形成する1つの条件として機能する。その観念は、それに従うとき、積極的な成果を決定する。

達せられた目的や結果は常に諸活動の組織であり、そこでの組織は諸要因として参入するあらゆる諸活動の調整である。目論見は、関連のある他のすべての副次的活動の中の調整要因として働くその特殊な活動である。調整としての、あるいは統一された諸活動の組織としての目的の認識、ならびにこの調整を達成する手段である特殊な活動としての目論見の認識は、継起する各段階が等しく目的でもあり手段でもある暫定的な諸活動の連続という観念に付着するように思われる矛盾のあらゆる外観をも廃棄する。達せられた目的や結果の形式は常に同じ、つまり適切な調整の形式である。継起的な各結果の内容やその関連事項は、その先行結果のそれとは異なる。というのも、それは、対立や必要を通じた妨害の期間の後に、統一された進行中の行為の再現であるとともに、新たな事態の実現でもあるからである。それは、独特な必要、欲望、および目論見が存するところの以前の活動状態の完結的解決であるのに適した特質と特性を有する。諸活動を1つの調整され調整する統一に組織化する継続的な暫時的過程において、それを構成する1つの活動は目的でもあり手段でもある。つまり、それが一時的かつ関係的に1つの終結である限り、目的であり、またそれが更なる活動において考慮されるべき1つの条件を提供する限り、手段なのである。

手段が目的・対象を実現させるのに役立つまさにその対象の構成要素となっている状況の存在には何か不思議なことや矛盾したことがあるどころか、そのような状況は、活動

を先行する困難の解決に方向づける目論見の知性的な投射に行動が成功するときには常に起きる。目的と手段が分かたれるケースは異常なケースであり、知的に導かれた活動から逸脱したケースである。例えば、全くの苦役しかないところには、目論見や達せられる目的からも必要不可欠な手段が切り離されている。他方、夢想的で幻想に類する、いわゆる「理想」が存在するところではどこでも、今度はいわゆる**目的**からの同様の分離が起きる。手段が生み出す当の目的や結果の構成要素にならない手段は、「必要悪」と呼ばれるものを形成する。その「必要」は知識と技法の現状に関係する。その必要悪は、後ほど取り壊されなければならなくなったが、エレベーターが設置されるまでは建物を建てるのに必要であった足場と比べられうる。エレベーターは建てられた建物の中で使用するために残され、順次に建物全体の一部をなす資材運搬手段として用いられた。欲望された特殊な事物の生産においてかつて必然的に浪費的な産物であった成果や結果は、更なる先の欲望された結果のための手段として人間の経験と知性の発展という観点で利用されたのである。あらゆる進歩した技法や科学技術において作用する経済効率性に関する一般化された理想や標準は、分析によると、達せられる目的の構成要素であり、また更に先の目的に対する手段として用いられうる目的の構成要素でもあるところの手段の概念に相当する。

**活動**ならびに**諸活動**は、これらの語が先の説明中に用いられるように、いかなる実際の行動とも同様に、現存する物質を含むということが、また明記されなければならない。それは、呼吸が空気を含み、歩行が地面を含み、売買が商品を含み、探究が調査される事物を含む、等のようなものである。いかなる人間活動も真空の中では行われぬ。それは、世界の内に活動し、それに関して、またそれを通して成果を生み出すところの物質をもつ。他方、いかなる物質——空気、水、金属、木、等——も、何事かを成し遂げるための何らかの人間活動において用いられなければ、**手段**ではない。「諸活動の組織」が言及される時、それは常にそれ自身の内部に、われわれが住む世界の内に現存する物質の組織を含む。かくして、価値づけの具体的な各状況にとって「終局的」価値であるその組織は、更なる先の欲望と関心、あるいは価値づけの形成において考慮されなければならない現存する諸条件の部分形成する。特定の価値づけが事物の手段・目的関係における事物の無思慮な近視眼的な究明ゆえに無効になる程度に応じて、後続する合理的価値づけの途上に諸困難が置かれる。欲望と関心が手段として現実の成り行きを決定する諸条件を批判的に調べた後に形成される程度まで、後続の諸活動はますます円滑に継続する。というのも、達せられる諸結果は、そのとき行為の連続の手段としてより一層容易に評価されるようなものだからである。

## Ⅶ. 1つのプログラムの概要としての価値づけの理論

価値づけの問題に関する現行の議論に及ぼす混乱ゆえ、当面の研究において行われる分析は、かなりの程度その混乱を源泉にまで追跡することに関わることを余儀なくされてきた。常識によって当然視される事実の経験的探究が見当違いな混乱した連想から解放されるには、このことが不可欠なのである。それよりも重要な結論は、以下のように要約されよう。

1. たとえ「価値 - 表現」が絶叫的であり、他の人々の行為に影響を与えるようなものであったとしても、そのような表現に関する純粋命題は可能であろう。われわれは、意図した結果になったかどうかを究明できよう。また、更に検討すれば、意図された結果を得るのに成功したケースとそうでないケースとの区別された諸条件を発見できよう。「情動的」である言語表現と「科学的」であるそれとを識別することは有益である。にもかかわらず、たとえ前者が何事をも述べていないとしても、それは他の自然的事象と同じように、その条件と結果を検討した結果として「科学的」命題の主題となりうるであろう。

2. もう1つの見解は、価値づけと価値 - 表現を欲望と関心に結びつける。欲望と関心は行動的現象（少なくとも「運動的」側面を含む）であるので、それらが作り出す価値づけは、そのそれぞれの条件と結果とに関して究明されうる。価値づけは経験的に観察しうる行動パターンであり、そのようにして研究されよう。それから生ずる命題は、価値づけに関するものであり、そのままでは、他の事実命題からそれを区別するいかなる意味においても価値 - 命題であるのではない。

3. 手段としての適合性と有用性とに関して事物が値踏みされるときには常に、独特な類の価値 - 命題が存在する。というのも、そのような命題は、生起したり既に存在していたりする事物や出来事に関してではなく（もっとも、それらは前文で言及した類の命題から離して適切に設定することはできないが）、生み出されるべき事物に関するものであるからである。さらに、それらは事実に論理的に条件づけられる一方で、単なる予言以上のものでもある。というのも、当の事物は、何らかの人的行為の介入を経なければ、所与の状況下では起こらないようなものであるからである。その相違は、いかなる場合でもある腐蝕が起こるだろうと予言する命題と、ある人々が介入してある行為を遂行する場合には、その腐蝕はその人々によって見られたり経験されたりするだろうという命題との相違と同様である。手段の値踏みとしての価値 - 命題は、あらゆる技法や科学技術において生起し、(先端工学テクノロジーにおけるように) 厳密に物理学的命題に基礎づけられ

るが、にもかかわらず、それらは本来手段 - 目的関係を含むという意味で、後者とは異なる。

4. 欲望が存在するところにはどこでも**目論見**が存在するが、それは単に全くの衝動、食欲、日常的習慣の場合のように生まれた結果ではない。所与の欲望に反応している予期された結果としての目論見は、定義上あるいは同義反復的に言えば**観念作用**である。それに関わる先見、予測、予期は、他のいかなる知的推理要因と同様、適切な観察活動の結論である命題に基礎づけられる程度において、保証される。いかなる所与の欲望も、その観念作用の構成要素ゆえに、現実の内容や「対象」においてあるままのものである、全くの衝動や食欲は、情動 - 運動として記述されるかもしれない。しかし、価値づけを欲望と関心に結びつけるいかなる理論も、まさにその事実によって、価値づけを情動的 - **観念作用的** - 運動である行動に結びつけるのである。この事実は、特有の価値 - 命題の存在**可能性**を証明する。欲望の実現あるいはその挫折のいずれかに寄与する諸活動を方向づける際に目論見が果たす役割から見て、もし欲望が理解されるべきものであり目的が近視眼的・不合理的でないはずのものであるならば、価値 - 命題の**必要性**は証明される。

5. それによって現実の結果が生み出される場所の諸活動の手段として、欲望と目論見についての必須の値踏みは、到達した結果が目論見の内容と比較対照されるとき達せられる諸結果の観察に依存する。不注意な無思慮な行為とは、実際に形成された欲望（従って実際になされた価値づけ）とそれに依拠して行為することで生み出される事物との一致と不一致の点を決定する探究を、なしで済ませるものである。欲望と目的として提起された対象の価値づけは本来結びついているので、また欲望と目論見は目的に対する手段として値踏みされること（保証された物理学的一般化に基づいてなされる値踏み）が必要であるので、目論見の価値づけは実際に生ずる諸結果によってテストされる。それは、結果に一致する程度まで確かなのである。一致しないことは、その偏差が注意深く観察される場合には、単なる失敗ではなく、以後の欲望と目論見の形成を改善する手段を供する。

要約すると次のようになる。(i) 特殊なケースと同様、一般に価値づけの問題は、相互に手段 - 目的関係を支える事物に関わる。(ii) 目的は、それを生み出すことに関わる手段に基づいてのみ決定されうる。(iii) 欲望と関心はそれ自身、外的あるいは周囲の諸条件との相互作用における手段として評価されなければならない。成就した結果としての目的と区別される目論見はそれ自身、指導的手段として機能する。普通の言葉で言うと、**計画**として機能する。手段としての欲望、関心、周囲の諸条件は行為の諸様態であり、したがって同質的および比較可能な用語に還元できるエネルギーの観点で考えられる。かくして、有機体と環境の2つの源泉から発するエネルギーの調整や組成は、価値づけのあら



ゆるケースにおいて手段であると共に到達した結果、つまり「目的」でもある。その2種類のエネルギーは理論的には(実際には未だ完全にはそうでないにしても)物理学的単位  
の用語で言明できる。

ここで述べた結論は、価値づけの完全な理論を構成しない。しかしながら、それらは、  
そのような理論が満足させねばならない諸条件を述べている。目的-手段の関係を支える  
事物の探究が体系的に導かれ、その結果が欲望と目的の形成に即して関係づけられるよう  
になってこそ、実際の理論が完結されうるのである。というのも、価値づけの理論はそれ  
自身、知的ないし方法論的手段であり、そのようなものとして使用する内に発展され完成  
されうるからである。その使用は現在何ら適当な方法では存在しないので、進められた理  
論的考察と到達した結論は、完結した理論というよりもむしろ企てられるべきプログラム  
を概観するのである。その企ては、具体的に関心と目的を形成する規制された指針によっ  
てのみ実行されうる。この企ての主要な諸条件は(価値づけと欲望ならびに関心との関係  
に関する現行の理論と比べて)、欲望と関心は最初から与えられた既製品であるのではな  
いという認識であり、それは初めのうちそう思われるかもしれないような、何らかの価値  
づけ理論の出発点、原データ、あるいは前提であるのではないという認識である。という  
のも、欲望は常に、先行する諸活動の体系や相互に関係するエネルギーの内部で創発する  
からである。それは、1つの場が粉碎されるか分裂の危機があるとき、対立が危急の緊張  
を導くかそれを導入するよう迫るとき、その場の内で生ずるのである。1つの関心は、ま  
さに1つの欲望を表すのではなく、諸欲望相互の結びつき、継続する行動過程における一  
定の秩序ゆえに、経験において生じた一組の相互に関係した諸欲望を表すのである。

価値づけの存在とその性質のテストは、それが観察にさらされるときの実際の行動であ  
る。諸活動の現存する場(周囲の諸条件を含めて)は、受け入れられるのか。ここで、「受  
容」とは、逆の条件に反してそれを維持する努力からなる。さもなければ、それは拒否さ  
れるのか。ここで、「拒否」とは、それから逃れて別の行動の場を生み出す努力からなる。  
そして、後者の場合、目的として欲望-努力(あるいは関心を構成する欲望-努力の組織)  
が方向づけられるところの現実の場とは何であるか。行動の目的としてのこの場の決定は、  
何が価値づけられるかを決定する。実際に衝突があるか、その恐れがあるかして、ある状  
況が妨害されるまでは、直接的行為——公然たる行為——で前進すべき青信号がある。必  
要もなく、欲望もなく、価値づけも存在しない。ちょうど何ら疑念のないところには探究  
の原因もないのと同じである。探究を喚起する問題が問題の出現する経験的状况に関係づ  
けられるのと同じように、欲望と到達すべき結果としての目的の投企は具体的な状況なら  
びにその変容の必要性に関係がある。立証の責任は、いわば差し迫った阻害的な、そして

対立と必要とを導き入れる諸条件の生起に存する。欠乏と必要とを構成し、このようにして到達しうる目的や結果の形成の積極的手段として役立つような諸条件についての状況を検討することは、保証された（必須かつ効果的な）欲望と目論見がそれによって形成されるところの方法である。要するに、それによって価値づけが行われるところの方法なのである。

これまで長引いた分析の必要を生み出してきた現存の諸理論における混乱と誤謬は、欲望と関心をそれらが生じる脈絡的状况ではなく原初的なものと考えることから大概起きる。欲望と関心がそう考えられるとき、それらは価値づけに関して究極的なものになる。いわば、一般的に考えられるときには、それによってそれらを経験的にチェックしテストできるものは何もない。もし欲望がこの原初的性質のものであるとしたら、もしそれが何らかの具体的経験状況の構造と要請とは無関係で、したがって現存の状況と関連して成就する機能を何ももたないとしたら、あらゆる欲望における観念的あるいは知性的要因の必要性を、そしてその妥当性の経験的条件の充足に対するその結果としての必要性を主張することは、批評家達が言うように余計なことであり見当違いのことであろう。その主張は、その場合、個人と社会の「改革」の関心から生まれる、いわゆる「道徳的」偏見であるかもしれない。しかし、経験的事実において、欲望と関心はそれらが貧弱な手段あるいは立派な手段のいずれかとして生起し機能する何らかの活動の場から離れては存在しないのであるから、当の主張は、それを検討すると、欲望と関心一般の**概念**の弁証法的操作となるものに対して、現に存在するものに単に全く正しい経験的説明を与えるためであり、欲望がその存在の脈絡から孤立して考えられるときにのみ可能な手続きなのである。

学説の歴史において、一方の極の誤謬が他方の極の補完的な誤謬を誘発することは、日常的な出来事である。ここで考察したタイプの理論は、価値づけの源泉としての欲望をいかなる存在的脈絡からも、従って欲望の内容と対象を知的に制御するいかなる可能性からも孤立させるものである。それによって、それは価値づけに任意の材料を与える。それは、結局、いかなる欲望もそれが立てる価値に関しては他のいかなる欲望とも全く同じように「良い」のだ、と言うのである。諸欲望——およびその関心への組織化——は人間の行為の源泉であるので、この見解は、もしそれが体系的に行為づけられるようになれば、完全な混沌に達するような無秩序な行動を生み出すであろう。対立、しかも不必要な対立にもかかわらず、完全な無秩序が存在していないという事実は、実際には現存する諸条件と諸結果に対する何らかの程度の知的尊重が、欲望と価値づけの形成における制御的要因として働くという証拠である。しかしながら、知的および実践的な無秩序の方に向かう学説の含意は、反対の学説を喚起するようなものである。それはしかし、価値づけを具体的な経

験的状况、その可能性、およびその要求から孤立させるという同じ基本的な要請を有するものである。これは、あらゆる価値づけの究極的規準としての「目的自体」の学説——諸欲望が、その価値づけの標準と理想としてのアприオリな絶対的目的の外的制御を受けるのでなければ、また受けるまでは、「終局的価値」と何らかの関係があるということを暗黙的または明示的に否定する学説である。この学説は、無秩序の価値づけというフライパンから逃れようと努力して、絶対主義の火中に飛び込む。それは、他のすべてを犠牲にして、ある特定の人々や集団の特定の関心に終局的かつ完結的な合理的権威の擬装を付与する。すなわち、欲望の、従って価値づけと価値 - 特性の知的で経験的に合理的ないかなる支配も可能ではないという考えを、その結果ゆえに次第に強めるような見解である。定義によって、経験的にテスト可能でない（それはアприオリであるから）諸学説と、辛うじて欲望の**概念**から引き出された結論を具体的な欲望の観察結果に無意識に代える表面的には経験的な諸学説との間の上下動は、かくして維持される。アприオリな学説に関する驚くべき（もし哲学思想史がその調査から省かれたとしたら驚くべき）ことは、価値づけが個人的および社会的な人間行動の不断の現象であり、物理的関係の知識によって提供される資源を用いることによって矯正と発展が可能であるという事実を、それが完全に無視しているということである。

## VIII. 価値づけと社会理論の諸条件

われわれは、かくして、この研究の冒頭の部分で示したように、価値づけと価値の問題の現在の関心の背後にある問題、すなわち人間活動が単に衝動的ないしは常軌的でないときには常に、人間活動に影響を与えるところの目標、計画、手段、および政策に関する純粹で根拠ある命題の可能性、にまで導かれてきた。理論としての価値づけの理論は、欲望と関心の形成の方法が具体的状況下で観察しなければならない諸条件を述べることができるだけである。そのような方法の存在の問題は、その主題として個人的であれ社会的であれ人間活動の知的行為を有するところの、純粹命題の可能性の問題と全く同一である。良いという意味での価値が活動の進行を助長し促進し支援するものと本来関係し、また正しいという意味での価値が活動の進行の維持に必要とされ要求されるものと本来関係する、という見解は、それ自身新奇なものではない。実際、**価値**という語の語源そのものによって、「資する」「勇氣」「有効な」「無効な」という語を連想するように示される。前述の議論がその考え方に加味したものは、もし価値づけがこの意味で考えられるなら、また考えられる場合にのみ、価値づけの源泉としての欲望と関心に関する経験的に根拠づけられた

命題——そのような命題は、それが目的・手段として相関される諸活動に関する命題を形成する手段として科学的・物理学的一般化を利用する程度において根拠づけられるのであるが——は可能であるということの証なのである。その結果生じる一般的命題は、知性的な人間の活動を方向づける標的、目標、計画、および政策の価値づけに規則を提供する。それは、与えられた特定の目的の諸価値を、直接的あるいは目視によってわれわれに知らすことができるという意味での規則ではない（それは、理想や標準としてのアприオリな価値に対する信仰に横たわる馬鹿げた探求である）。それは、多様な行動様式の条件と結果を各々決定する究明行為における秩序立った手続き規則である。それは、価値づけの諸問題をそれ自身で、またそれ独自で解決しようということを意味するのではない。それは、もしこれらの問題が解決されうならば、またそのような探究行為における指導原理としてこの様式で役立つべきならば、探究が満足させなければならない諸条件を述べるよう主張するのである。

I. 価値づけは実際に存在するし、経験的観察が可能である。それゆえ、それに関する命題は経験的に検証可能である。個々人や諸集団が大事にしたり尊重したりするところのもの、および彼らがそれを尊重するところの根拠は、その**実際の困難**が途中いかに大きくても、原理的には確かめることができる。しかし、概して、過去において価値は慣習によって決定されてきた。その際、それは、何か特殊な関心を好むがゆえに、賞賛されるのであり、その賞賛は強制や推奨、あるいはその両者を伴う。価値づけの科学的探究の方法における**実際の困難**は大きい、また非常に大きいので容易に固有の理論的障害と誤られる。さらに、価値づけについて現存するような知識は、その妥当性はおろか、それを組織するまでにはほど遠いものがある。価値づけは経験的事実の内には存在せず、それゆえ価値・概念は経験外の源泉から取り込まなければならないという考え方は、人間の精神がかつて受け入れてきた最も奇妙な信念の1つである。人間は、絶えず価値づけに従事しているのである。その価値づけは、更に先の価値づけ作業の、また価値づけの一般理論の元なる材料を供給する。

これら価値づけの知識は、われわれが見たように、それ自体、価値・命題を提供しない。それはむしろ、歴史的ならびに文化人類学的知識の性質なのである。しかし、そのような**事実的知識**は、価値・命題を定式化する能力の**必要条件**である。この言明こそ、過去の経験が、正しく分析され秩序づけられる場合、われわれが**未来の経験**において有する唯一の指針であるという認識を含むのである。その個人的経験の限界内にあるある個人は、彼の欲望と目的が過去に生み出した結果を知るようになるにつれて、それらを修正する。この知識は、彼が彼の将来に関する活動の起こりうる結果を予測し、それに従って彼の行為を

方向づけるのを可能にするものである。未来の結果に対する現在の欲望と目的との関係に関する確実な命題を形成する能力は、次には、これら現在の欲望ならびに目的をその構成要素に分析する能力に依存する。それらが総じてとらえられるとき、予見はそれに相応して粗雑な漠然としたものになる。科学史は、予言の力が粗雑な質的出来事を基本的構成要素に分解することと並行して増加してきたことを示す。ところで、生起した出来事としての人間の価値づけの適当かつ組織化された知識が欠如している場合、特殊な因果的条件の結果の観点で新たな価値づけを定式化する確実な命題が存在するという事など、なおさら不可能である。個人的ならびに社会的な人間活動の連続性のために、現在の価値づけの意味は、その価値づけがその連続している過去の価値づけ - 出来事の展望の内に定位されるまで、確実には言明されえない。この知覚なしに、未来の展望、すなわち現在の新たな価値づけの結果は不確定である。現存の欲望と関心（従って価値づけ）が過去の諸条件との関係で判断される程度において、それらは観察と経験的テストの可能な証拠に基づいて再度価値づけることを可能ならしめる脈絡の中で見られる。

例えば、現行のある特定の一組の価値づけは、それに先行する歴史的条件として、ある排他的特権や利点を維持することに1小集団や特殊階級の利害があり、そしてこの維持が他者の欲望の範囲とそれを実現させる彼らの能力とを共に制限する効果をもつことが、確かであると想像されたい。この条件と結果の知識は確かに価値づけの権威ある源泉であると仮定されてきた欲望と目的の再評価になるであろう、ということは明白ではないのか。それは、そのような再評価が必然的に直ちに効果を表すというのではない。しかし、所与の時に存在する価値づけがこれまで有すると想定されてきた支持を欠いていることに気づくとき、その価値づけはそれを継続して保有しているのとはおよそ反対の脈絡の中に存する。長期的に見れば、その効果は、ある水溜りが病原菌を含んでいると知った結果、この水溜りに対してとる態度がますます慎重になると似ている。他方、もし所与の現存する価値づけの一組が、その実施の規則も含めて、欲望ならびに関心の個人的能力を解放するようなものであることが究明によって示されれば、またある集団全員の欲望と関心の相互強化に寄与する仕方で示されるとすれば、この知識が当面の価値づけの特定の組み合わせの防御として役立たないということはいえないうし、またその価値づけの存在を正当と認めるよう強化された努力を誘導することがないということもありえない。

Ⅱ. これらの考察は、次のような中心問題に至る。過去と現存の価値づけの知識が新たな欲望と関心——経験のテストが最も育成する価値があることを示す欲望と関心——の形成において価値づけの道具となるように適応されなければならない条件とは何か。価値づけのいかなる抽象理論も現存する価値づけを判断する標準として、現存する価値づけと言

わば並べて置くことはできない、ということはわれわれの見解からすれば明らかである。

その解答は、改善された価値づけは現存する価値づけを相互に体系的諸関係に統合する究明の批判的方法に従って、現存する価値づけから成長しなければならない、ということである。これらの価値づけが概しておそらく大いに欠点があることを認めて、進歩はそれらを相互に関係づけることから生ずるだろうという観念は、初めの間はあたかも自分の長靴の紐で自分の身を持ち上げることがを勧めているのと同様であると思われるかもしれない。しかし、そのような印象は、いかにして価値づけが実際に相互に、すなわちいかにして価値づけのそれぞれの条件と結果の検討によって、関係づけられうるかということ考察することができないからこそ、生まれるのである。この路線に従ってのみ、価値づけは、それらが相互に比較しうるような同質的な語に還元されることになる。

この方法は、実際、人間あるいは社会の現象に物理学や化学の主題を扱うのに成功している方法を単に持ち込むのである。これらの分野においては、近代科学の誕生までは、孤立していて外見上相互に独立しているように見られる一団の事実があった。理論の内容を形成する概念が現象そのものから引き出され、そして、さもなければ切断された諸事実を相互に関係づけるための仮説として用いられるようになったとき、その時から体系的な進歩が始まるのである。例えば、普通の飲料水が機能上 $H_2O$ と見なされる場合、起きたことは水が無数の他の諸現象に関係づけられ、その結果推理と予言が無限に拡大され、同時に経験的テストにさらされるようになったということである。人間の諸活動の分野において、目下、かなり完全に孤立して存在している無数の欲望と目的の事実がある。しかし、諸仮説を相互に関係づけることができ、その結果生じる命題が未来の欲望と目的の形成の、またそれによって新しい価値づけの形成の方法的統制として役立つであろうものと同じ経験的序列の仮説など存在しない。材料は豊富にある。しかし、その構成要素を結実するような結合にもたらすための手段が欠けている。この実際の価値づけを相互に関係づける手段の欠如は、実際の価値づけの外（「上」が通例の用語である）にある価値の標準ならびに理想を信じる原因にもなっているし、また結果にもなっている。欲望と目的の統制の何らかの方法が経験的な方法を欠いている際に、必要を満たすように思われる概念ならいづれも把握しようとするほど重要な要求である限り、それは原因である。アプリアリな諸学説がひとたび形成され威信を得てしまうと、それらは関係する価値づけの具体的な方法の必要性を隠蔽するのに役立つ、またそうすることによって、衝動と欲望をそれらが占めるまさにその位置がそれらの評価に影響するところの脈絡の中に位置づけるために知的な道具を提供するという意味で、それは結果である。

しかしながら、途上に立ち塞がる困難は、主として実践的な困難である。それは、体系

的・経験的究明に晒されないで固執し、そして更なる先の欲望と目的の最も影響力ある源泉を構成するところの伝統、慣習、および制度によって供される。これは、これらの欲望と目的に表面上の知的な状態と威信を与えるために、これらを「合理化する」のに概して役立つアプリアリナ諸学説によって補足される。したがって、現在、科学的方法によって規制される主題の内に同様の障害がかつて存在していたことを記述する価値がある。顕著な例として、数世紀前、コペルニクスの天文学を弁明させてもらう場合に経験した困難を考えてみよ。強力な制度によって黙認され維持された伝統的で慣習的な信仰は、新たな科学的観念を危険だとみなした。にもかかわらず、実際の観察と実験の証拠によって証明されうる命題を生み出した方法は、持続し、その範囲を拡げ、絶えず影響力を獲得した。

結果として生じてきた、そして今や物理学、化学、そして次第に生物学にまで拡がって行くその実質的内容を形成するところの命題は、人間的ならびに社会的現象を扱おうとする信仰や観念に必要な変化が導入されるところのまさにその手段を提供する。自然科学が現在の状態に接近する何かを得るに至るようになるまでは、新しい価値づけの産出を規定する方法として順次役立つ。価値づけの根拠ある経験的理論は、問題外であった。欲望と関心は、それらがそこで表現される諸活動が物理的条件と相互作用することで環境に影響を与えるときにのみ、結果を生むのである。物理的条件について何ら適切な知識もなく、またそれらの相互関係に関する十分根拠ある命題もなかった(知られた「法則」も全くなかった)限り、その評価に含まれる代替的な欲望と目的の結果を予測するようなことは、不可能であった。厳密に物理学的な事柄に用いられる技法や科学技術が科学的支持を得るようになったのが——人間が地球上に存在した時間の長さと比較して——いかに最近のことであるかに注目するとき、人間の社会的ならびに政治的事象に結びつけられる技法の背後の条件は、何ら驚くに当たらない。

心理学は現下、天文学、物理学、および化学が純粹に実験科学として初めて出現してきたときと酷似した状態である。しかも、そのような科学なしには、価値づけの体系的な理論的統制は不可能である。というのも、有能な心理学的知識なしには、諸結果を生み出すべく周囲の非人的諸条件と相互作用する人的諸要因の力は評価されえないからである。この言明は、人的諸条件の知識が心理学であるので、自明のことである。さらに、1世紀以上に渡って、心理学的知識で通用したものの中心的な観念は、目論見の形成を統制するのに必要な結果の予測を実際には邪魔するようなものであった。というのも、心理学的主題が物理的環境に対して上置きされた心霊的あるいは精神的領域を形成すると考えられたとき、探究はそのようなものとして、精神的なものとの間の相互作用の可能性の形而上学的問題に逸らされ、また評価の中心の問題、すなわち欲望と目的の実際的結

果を決定する人間の行動と周囲の諸条件との間の具体的な相互作用を発見する問題から離れた。人間行動の諸現象の根拠ある理論は、物理的（非人的という意味での）事物の行動理論と同じく価値づけの理論の必要条件であった。生き物の現象に関する科学の発達は、健全な心理学の発達の絶対的な必要条件であった。生物学が非人的なものとの間にある物質的事実を供するまでは、後者の表面上の特性は前者のそれとは非常に異なっていたので、二者間の完全な溝に関する教義は唯一説得力のあるものと思われた。根拠ある価値命題に終結する知識の連鎖において見失われた繋ぎは、生物学的なものである。その繋ぎが進行過程にあるので、価値づけの経験的理論の発展に対する障害が知性の欠如よりもむしろ制度的および階級的利害から流れる習慣や伝統の障害であるような時代が、間もなく到来することを期待することができよう。

文化人類学と名づけたらおそらく示唆的であろう社会学の観点での人間関係の理論の必要は、効果的な手段として価値づけの理論の発展の更なる条件である。というのも、人間有機体は文化的環境の中で生きるからである。文化的環境との相互作用によってもたらされた変形ゆえに、正味の衝動と厳密に有機的な食欲とから区別して、現在あるがままのものでないどんな欲望も関心も存在しない。全く正しく価値づけを欲望と関心に関係づける現行の諸学説を検討するとき、欲望と目的の形成において、またそれによる価値づけの形成において文化的条件や制度の役割をその諸学説が無視することほど——体系化されているので非常に拡大している——顕著なものはない。この無視は、おそらく、具体的に存在する諸事実としての欲望と価値づけの究明を欲望の概念の弁証法的操作に置き換えることの最も確実な証拠である。さらに、人間行動——特に欲望と目的の現象を含む——に関する適切な理論は、個々人が生活し移動しその存在を保持している文化的環境を離れてその人たちを考察することによって形成されうる、という考え方——まさに形而上学的個人主義と呼ばれうる理論——は、価値づけ・現象を未検討の伝統、慣例、および制度化された慣習に従属させておく精神的領域の形而上学的信仰と結びついてきた<sup>2)</sup>。価値づけ・現象

2) 形而上学的な文章は「無意味」であるという時々なされる言明は、文化的に言えば、それが有意義な文化的効果を有しているという意味での意味を欠いているところではないという事実を、通常説明することができない。事実、それを除去する弁証法的近道が存在しないというこの点で、それは無意味どころではない。なぜなら、その除去は、文化的条件を変更する科学的方法の具体的適用によってのみ遂行されるからである。経験的関わりをもたぬ文章は無意味であるという見解は、それが意味すると称し、あるいはそう装っているところのものは理解できるように与えられることはできないという意味で、健全である。そして、この事実は、おそらくこの見解を抱く人たちが言わんとするところのものである。実際に存在している諸条件の兆候や記号として解釈されるならば、それは非常に有意義であるかもしれないし、また通常は有意義である。そして、その最も効果的な批判は、それが根拠となる諸条件の開示である。



がその直接的源泉を行動の生物学的様式の内に有しており、その具体的内容を文化的諸条件の影響に負っていると見られるだけで、「事実の世界」と「価値の領域」との間に存すると確言される分離は人間の信仰から消滅するであろう。

ある人々によって「情緒的」と「科学的」との言葉の間にあると考えられている確固とした越せない線は、人間の諸関係や諸活動における知性的なものとの間に現存する間隙の反映である。現在の社会生活において存在する観念と情緒との間の分裂、特に**科学的**保証のある観念と実践を支配する無統制な情緒との間、すなわち感情的なものとの間の分裂は、おそらく世界が苦しんでいる不調整と耐え難い緊張の主な源泉の1つである。知性的なものとの分離によって生まれる緊張は非常に耐え難いから、人間は、たとえそれが一時的な絶滅であるにせよ、そう思われるためには、ほとんどいかなる代価を払うことをも厭わないという事実を説明しないような、専制が生まれる心理的側面に関する適切な説明が見出されうるか、私は疑う。われわれは、情緒の忠実さと愛着が科学的探究において正当な結論に達する方法で認められているあの知的な忠実さをもはや命じないところの諸対象に集中している時代に生きているのである。それに対して、探究の原理にその起源を有する観念は、情緒の熱烈さのみが供するような力を獲得することには、未だ成功していない。直面しなければならない**実際的な**問題は、情緒と観念、欲望と値踏みが結合されるような類の行動を支えるであろう文化的諸条件の確立である。

したがって、もしこの研究の初めの諸節での議論が価値づけの源泉である欲望と関心の形成における妥当な**観念**の重要性に主な力点を置いてきたように見られるならば、また経験的に保証される事実問題によって、この観念作用的要因の統制の可能性と必要性に主に注意を集中してきたように見られるならば、それは価値づけの**経験的**(アプリアリ)と区別して)理論が観念作用的なものから切り離された情緒的なものとして欲望の観点で、今日述べられるからである。実際また正味の結果からして、これまでの議論は、少なくとも知的なものによる情緒的なものの排除を指摘しない。その唯一の完全な意義は、行動——普通の言い方をすれば、頭も心もその中で共に機能するところの、より専門的な言葉を用いれば、尊重することと値踏みすることが行為の方向に結合するところの行動——における両者(知的なものと情緒的なもの)の統合の必要である。物理的なもの——非人的という意味で——の知識の発達が光、熱、電気などのようなものに関して人間活動の自由の範囲を制限してきたということは、実際に行われてきたことを鑑みて、誰もそうだとは思わないほどに馬鹿げている。事実問題に関する証明可能な命題によって価値づけがまた秩序づけられるとき、人間活動に影響を与える価値づけを生み出す際の欲望の働きも解放される

であろう。

この『百科全書』が関与する主要な**実際**の問題、つまり科学の統一は、ここでまとめて述べるのが妥当であるかもしれない。というのも、今日、知識における最も広い間隙は、人間の問題と人間以外の問題との間に存するものであるからである。非人格的な人間的ではない科学の結論がわけても人間行動、すなわち手段と目的の形成において情緒と欲望に影響されるところの行動の行方を導くのに利用されるとき、その断絶は消滅し、間隙は埋まり、そして科学は単に観念においてだけでなく実際に統一をはかるものとして示されるであろう。というのも、欲望、目論見をもつこと、従って価値づけを含むことは、人間的ではない行動から人間行動を区画する特徴であるからである。他方、わけても人間の使用に供せられる科学は、その内に人間以外の世界に関する保証された観念が人間特性としての情緒と統合されるところのものである。この統合において、科学はそれ自体1つの価値である（なぜなら、それは特殊な人間の欲望と関心の表現と充足であるからだ）のみならず、人間的ならびに社会的生活のあらゆる局面におけるあらゆる価値づけの妥当な決定を下す至高の手段でもあるのである。

## 参考文献

- Ayer, A. J. *Language, Truth, and Logic*, New York, 1936.
- Dewey, John. *Essays in Experimental Logic*, pp.349-89. Chicago, 1916.
- . *Experience and Nature*. “Lectures upon the Paul Carus Foundation, First Series.” 1st ed., Chicago, 1925; 2nd ed., New York, 1929.
- . *Human Nature and Conduct*. New York, 1922.
- . *Logical Conditions of a Scientific Treatment of Morality*. Chicago, 1903. Reprinted from *The Decennial Publications of the University of Chicago, First Series*, III, 115-39.
- . *The Quest for Certainty*. New York, 1929.
- . *Art as Experience*. New York, 1934.
- Dewey, John, and Tufts, J. H. *Ethics*. Rev. ed. New York, 1932.
- Dewey, John, et al. *Creative Intelligence*. New York, 1917.
- Joergensen, J. “Imperatives and Logic,” *Erkenntnis*, VII (1938), 288-96.
- Kallen, H. “Value and Existence in Philosophy, Art, and Religion,” in *Creative Intelligence*, John Dewey, et al. New York, 1917.
- Köhler, W. *The Place of Value in a World of Facts*. New York, 1938.

- Kraft, Viktor, *Die Grundlagen einer wissenschaftlichen Wertlehre*. Vienna, 1937.
- Laird, John. *The Idea of Value*. Cambridge, 1929.
- Mead, G.H. "Scientific Method and Moral Sciences," *International Journal of Ethics*, XXX III (1923), 229-47.
- Moore, G. E. *Principia Ethica*. London, 1903.
- Neurath, Otto. *Empirische Sociologie; der wissenschaftliche Gehalt der Geschichte und Nationalökonomie*. Vienna, 1931.
- Pell, O. A. H. *Value-Theory and Criticism*. New York, 1930.
- Perry, Ralph Barton. *General Theory of Value*. New York, 1926. Also articles in the *International Journal of Ethics* (1931), *Journal of Philosophy* (1931), and *Philosophical Review* (1932).
- Prall, David W. "A Study in the Theory of Value," *University of California Publications in Philosophy*, III, No.2 (1918), 179-290.
- . "In Defense of 'Worthless' Theory of Value," *Journal of Philosophy*, XX (1923), 128-37.
- Reid, John. *A Theory of Value*. New York, 1938.
- Russel, B. *Philosophical Essays*. New York, 1910.
- Schlick, Moritz. *Fragen der Ethik*. Vienna, 1930. English trans., *Problems of Ethics*. New York, 1939.
- Stuart, Henry Waldgrave. "Valuation as a Logical Process," in *Studies in Logical Theory*, ed. John Dewey et al. *The Decennial Publications of the University of Chicago*, Vol. XI. Chicago, 1903.